

1 当院の ESBL 産生菌の分離状況と抗菌薬  
2 の使用状況

3  
4 樋口綾子 麻生恭代 西田香南 中村博 喜納勝成  
5 中澤武司（順天堂大学浦安病院）

6  
7 【目的】近年 ESBL 産生菌は増加傾向にあり、当院で  
8 の血流感染においてもカルバペネムの使用量増加が  
9 見られている。今回、我々は当院における過去 5 年  
10 間の ESBL 産生菌の分離状況、血液培養から検出され  
11 た ESBL 産生菌に対する抗菌薬使用状況についての  
12 調査および抗菌薬の適正使用状況に加え、2010 年に  
13 CLSI より改定された腸内細菌科のブレイクポイン  
14 トの変更による ESBL 試験の実施、抗菌薬の適応を考  
15 慮した新しいブレイクポイントを用いた感受性試験  
16 の動向について報告する。

17 【方法】2007 年 4 月～2011 年 3 月までの 5 年間に当  
18 院で分離された ESBL 産生の *E. coli*, *K. pneumoniae*,  
19 *K. oxytoca*, *P. mirabilis* を対象とした。同定および  
20 感受性は MicroScanWalkaway96 plus (siemens 社)、  
21 ESBL 確認試験はシカベータテスト（関東化学）にて  
22 行った。抗菌薬使用状況については 2009 年 4 月～  
23 2012 年 11 月までに血液培養より ESBL 産生菌が検出  
24 された患者 30 例について調査を行った。

25 【結果】過去 5 年間の ESBL 産生菌の検出状況にお  
26 いて、*E. coli* については入院、外来問わず増加傾向  
27 であった。抗菌薬の適正使用に関しては、初期投与  
28 薬としてカルバペネムが多く使用されていたが、新  
29 ブレイクポイントを用いた薬剤感受性結果は  
30 CAZ94.8%、AMK99.8%の感受性があり比較的良好であ  
31 った。

32 【考察】ESBL 産生菌は今後も増加が予想され、抗菌  
33 薬の選択はより重要となってくる。腸内細菌科のブ  
34 レイクポイントの改定により、セファロスポリンの  
35 使用が可能となったことによりコスト削減や耐性菌  
36 の抑制に寄与できる。また、CAZ と AMK の感受性が  
37 比較的良好なことから、血液培養でグラム陰性桿菌  
38 が検出された場合、第一選択剤としてセファロスポ  
39 リン等の使用を推進していきたい。047-353-3111